ひと烈風録 第37回

医療暗黒大国に風穴 レセプト開示の立役者

医療被害者の立場からレセプト（診療明細書）の開示を求めてきた。その闘いは挫折続きだ。だが粘り強い主張が日本の医療を変えてきた。

ノンフィクション作家 辰濃哲郎

写真 ヒラオカスタジオ

「医療情報の公開・開示を求める市民の会」世話人、高校教員

勝村久司

かつむら・ひさし

1 990年に医療事故で長女を亡くして以来、その死を無駄にしないために闘ってきた。医療の世界は想像以上に固く閉ざされていた。風穴を開けようとしてははね返され、また挑むの繰り返しだった。

最後までこだわったのが「レセプト（診療明細書）の開示」だ。周囲があきれるほど愚直に、そして執拗に説いてきた。

医療事故の被害者でありながら、医療政策の要ともいうべき厚生労働省の中央社会保険医療協議会（中医協）の委員を6年務めた。

そこで医療の砦を崩した。

今では病院で支払いのときに誰もが当たり前のように明細書をもらえるが、それは15年に及ぶ闘いで手に入れた患者の権利であることは、あまり知られていない。

険しく、そして長い道のりだった。

京都府木津川市に住む勝村久司（55）は、大阪府立牧野高校の理科の教員だ。バドミントン部の顧問も務める。平日だけでなく、週末も試合や練習に明け暮れるから、医療にかかわる市民運動に費やせる時間はわずかだ。深夜にパソコンと向かい合い資料を読みふけるから、朝に弱い。

起こしてくれるのが妻の理栄（55）だ。服装には無頓着な勝村に代わって、スーツから靴下まですべて理栄が用意する。ネクタイも首にかけて締めるだけでいいように、いつでもわっかを作ってから渡す。

東大阪市で生まれた勝村は、マン

「心にスイッチが入ると、どうしても感情移入してしまう。真剣になると涙もろくなるので、最近は一生懸命にならないコツを覚えてきた」と笑う

ガや深夜ラジオ、フォークギターを奏でるふつうの少年だった。高校進学後もバドミントン部の練習以外には特に熱中したものはない。

ただ、勝村の大切にしていたもののひとつに、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』がある。どこかの小惑星からやってきた王子が、地球で命や愛の本質を説きながら、生きるうえでの道しるべを示してくれる。

受験を間近に控えたときでも、すぐ手の届く本棚に置かれていた。「さあ、勉強だ」と思っても、気づくと本のページをめくっている。天体観測が好きで、夜空を見上げて物思いにふけるのも、この本の影響だ。根っからのロマンチストなのだ。

理栄とは、府立高校の同級生だ。3年のときに付き合い始めた。よく星空を見上げて夢を語り合った。1浪して京都教育大学教育学部理学科に入った勝村だが、カフェバーなどでのバイトに明け暮れ、理栄に愛想をつかされそうになったこともある。

「ズボラで日常生活はいい加減だった」と自戒する。

陣痛促進剤による医療過誤。募る不信

その勝村のスイッチが入ったのは、教師になって初めて赴任した大阪の府立高校でだった。当時は府内で最も荒れた高校と呼ばれていた。休み時間になるとトイレにたばこの煙が充満する。体育の時間は、ほぼ全員が見学。授業が始まっても席に着かない。注意しようものなら「殺すぞ」とすごまれる。

学校に来ない生徒の家庭訪問を連日深夜まで繰り返した。

3年目だったと記憶している。

「運動会で全員リレーをやらんか」

勝村が提案した。

「ほとんどの生徒がサボっているのに、できるわけがない」

同僚教師に反対されると、勝村は意地になる。グラウンドを1人半周ずつ走ってバトンをつなぐクラス対抗リレーだ。仲間を説得して、開催にこぎ着けた。

当日、校舎の陰でたむろしていた生徒も、自分の番になるとチンタラではあるが責任を果たした。

近所の河川の堤防を走るマラソン大会も、反対する養護教諭を説き伏せた。歩く生徒もいたが全員が完走した。こういった企画が生徒の胸にどう届いたのかはわからない。ただ、思い込んだら相手を説得してでも実現させる粘り強さは、この頃から抜きん出ていた。

90年、二人は結婚した。ところがその年の12月、苦難が始まる。

ハネムーンベビーの予定日は12月中旬だった。ところが、12月3日、枚方市民病院での定期検診で入院を指示される。そこで薬剤名を告げられないまま陣痛誘発剤を服用させられた。陣痛が起きたが、事前に学んでいた感覚とはかなり違う。医師に異状を訴えたが、内診もせずに「陣痛促進剤注射！」と指示して部屋を出ていった。

異常な陣痛で気を失いかけながらも必死に耐えた。分娩台に乗ると、周囲が急に慌ただしくなった。

「赤ちゃん仮死状態。帝王切開！」

生まれた子は保育器の中でチューブにつながれていた。絶望的な容態であることは、誰の目にも明らかだ。勝村は、この子を星子と名付けた。天体観測が趣味の勝村が、生まれる前から決めていた名前だ。

理栄は寝返りさえ打てないほど痛みが激しいのに、歯を磨こうとする。どんな窮地に立たされても、ルーティンを続ける精神的な強さを持っている。「1日でも早く歩けるようになって、新生児室に行き星子に会いたい」。その一心だったという。

一方の勝村は病室の簡易ベッドに何日も寝転んだまま、食事も取らず放心していた。ショックが強すぎて動けない。思わず理栄がしかりとばした。

「お風呂屋さんにでも入ってらっしゃい！」

だが、出産から9日目、星子は保育器の中で亡くなった。

勝村の心に、再びスイッチが入る。「怖くて、痛くて、悔しかった理栄のため、そして星子のために、立ち上がらねば」。

陣痛促進剤の被害者団体に連絡を取り、医療過誤専門の弁護士に話を聞きに行った。弁護士の指示で、理栄からの聞き取りを始めた。

気が遠くなるほどの陣痛に襲われた理栄が、経過を分刻みで覚えてい

打開策が見えないとき、「何でこんなことをしているのだろう」と自問したこともある。それでもあきらめなかった

る。その冷静さと気丈さに勝村は驚いた。

翌年の1月、病院に立ち入ってカルテや看護記録などの証拠を押さえる証拠保全を裁判所に申し立てた。ところが、入手した看護記録に改ざんの疑いが出てきた。陣痛促進剤は注射器で肩に投与されたのに、点滴投与になっている。

レセプトの開示拒否。立ちはだかる医療界の壁

病院が医療費を請求するレセプトには、本当のことが書かれているはずだ。共済組合に夫婦で出向いて、レセプトの開示請求をしてみた。

レセプトとは、治療や検査、投薬など費目ごとに記録した診療報酬明細書のことだ。病院に支払われる診療報酬の点数がそれぞれの費目ごとに記載されている。医療機関が1カ月ごとにまとめて医療保険組合に提出する、いわば請求書だ。

ふだん買い物で品目ごとに値段が書き込まれたレシートを受け取るように、自分が支払った医療費だから簡単にもらえると思っていた。だが、医療の世界には世間の常識は通じなかった。担当者は、厚生省（当時）の通達によってたとえ本人であっても開示できないと言う。

3時間にわたり押し問答が続いたが、徒労に終わった。

カルテは改ざんされ、レセプトも開示されないのでは、病院の過失を立証するのは難しい。核心に迫る道筋はことごとく閉ざされ、手立てがない。だから医療裁判は原告が敗訴するケースが多いのだ。

準備に時間がかかったが、92年、大阪地裁に提訴した。

公判に入ると、今度は証人に立った主治医や助産師が明らかなウソを繰り返す。専門医による鑑定も、身内をかばう姿勢がありありだ。八方ふさがりとは、このことだ。病院の過失は明らかなのに、それを証明できないもどかしさが募る。

二人は、連れ立って市民団体の会合にも顔を出すようになった。当時は、インフォームドコンセント（I・C）の考え方は根付いておらず、カルテ開示の法制化の議論も始まったばかりの頃だ。市民団体はこれらの実現に向けて運動を進めていた。

だが勝村の考えは違った。レセプトさえ開示されれば、診療内容が白日の下にさらされるわけだから、カルテを非開示にする理由はおのずとなくなる。I・Cもカルテも大切だが、ゲームのオセロでいえば中央の駒にすぎない。角を取られれば、ゲームには負ける。オセロの角はレセプト開示だと確信していた。

カルテ開示運動を担う市民団体からも煙たがられたが、勝村はレセプト開示の重要性を主張し続けた。厚生省とも交渉を繰り返した。

97年、大阪地裁は原告敗訴の判決を下した。たとえ早く帝王切開に踏み切っていたとしても「胎児の予後はほとんど変わらず、死亡との因果関係はない」と、病院の過失を認めなかった。勝村は迷わず控訴の手続きを取った。

そして99年、大阪高裁での控訴審判決は、「遅くとも（異常に気づいた）15分後には帝王切開を決断すべきで、そうすれば胎児は救命できていた」と病院の過失を認めた。そのまま、判決は確定した。

その間、勝村家には新たな家族が

これまでの歩み

1961年 ● **東大阪市で生まれる**
小学校では担任に乗せられ、勉強に自信を持つ

85年 ● **大阪府の高校教員に**
京都教育大学を卒業し高校の理科教員に。天文が好きなロマンチスト教師だが、荒れた学校で学校新聞の発行やマラソン大会を企画するなど熱血派の側面も

90年 ● **結婚と子どもの死去**
高校時代の同級生だった理栄と結婚する。12月の出産で陣痛促進剤を使われ、仮死状態で生まれた女児が9日目に亡くなる。理不尽な子どもの死に直面して、夫婦で訴訟を準備するも、医療の大きな壁の前に糸口を見いだせずに絶望する。92年に裁判を起こす

97年 ● **敗訴**
母親の容態の異常に気づいても子どもの命は救えなかった可能性が大きいとされ敗訴。99年に大阪高裁で逆転勝訴し判決は確定

2005年 ● **中医協の委員に**
診療報酬を決める中央社会保険医療協議会の委員に就任。医療被害者の参加は画期的なことで、3期6年間務める。診療報酬明細書（レセプト）の開示義務化を一貫して主張したが、なかなか実らず。3期目の最終年となった10年の診療報酬改定で日の目を見る

～現在 ● **医療に患者の視点を**
11年に薬害オンブズパースン会議のメンバーに就任するなど、多くの患者団体に参加。15～16年には群馬大学医学部附属病院の腹腔鏡手術事故の調査委員会委員を務めた

増えた。星子の死から2年半後、長男が生まれた。「司法に真実を」との思いで「真司」と名付けた。95年生まれで脳性マヒの次男は、2歳半で生涯を閉じた。さらに2人の男児が生まれ、理栄は以前のように市民団体の会合に通えなくなった。

中医協の委員に。提案しては挫折の繰り返し

チャンスは突然、訪れた。2004年秋ごろだったと勝村は記憶している。東京の日本労働組合総連合会（連合）の幹部が会いに来た。

日本歯科医師連盟から賄賂を受け取っていた連合代表の中医協委員が収賄で逮捕された。代わりの委員に勝村を推したいというのだ。診療報酬の点数（価格）を決める中医協は医療制度の根幹を決める組織だ。

厚生省は97年、患者から請求があればレセプトを開示する方針を示していたが、勝村は病院窓口での全患者への無料発行義務化でなければ意味がないと考えていた。中医協でそれを認めさせたい。

だが、そんな甘い話ではないことを思い知る。

中医協では2年ごとに診療報酬の改定が議論される。健康保険組合など支払い側、医師や歯科医など医療側、そして公益代表の3分野で構成され、勝村は支払い側の委員だ。

05年の初会合で、勝村は演説をぶった。医療側と患者との意識のズレについて「医療提供者側から患者に十分な情報が与えられていなかった過去があったのではないか」。居並ぶ医療側委員を前に宣戦布告する。

マスコミがこぞって明細書発行を支持する論陣を張るなか、06年の改定では「医療費の内容の分かる領収書の発行の義務付け」にとどまった。検査や投薬などの項目ごとの小計が記されるだけで、診療内容まで踏み込んだものではない。

08年の改定に向けての議論が始まると、勝村はさらに先鋭化する。

事務局から示された原案では、400床以上の病院に限って、患者が希望した場合は実費を徴収したうえで義務化することになっている。

中医協の議事進行を担う土田武史会長（当時、早大教授）との間で応酬が繰り広げられたことがある。勝村がかみついた。

「2年前は、次の改定のときにはきちんと議論するから、今回は一歩前進ということでくんでほしいと、私の目をしっかり見られて、会長は言われました。それで私は2年間待ってきたわけです。今の段階でもう結論が出ているというような話は、僕はまったく納得できないし……」

何度も発言を求める勝村に、土田も少し苛立ったようだ。それまで「勝村委員」と呼んでいたのに、「あなたは」と話し始め、途中で気づいて慌てて謝った。

医薬の業界誌を発行する「医薬経済社」で中医協を担当する市川知幸記者は、勝村の発言を追ってきた。その市川が振り返る。

「いたたまれないくらい明細書にこだわっていた。そのたびに医療側から猛反撃を受けて圧倒される。勝村さんがすごいのは、そこでめげず、場の空気も読まずに言い続けたこと。事故被害者が中医協に入ったインパクトは大きいと感じた」

結局、この改定でも全患者への無料発行は実現しなかった。

そして任期最後の改定論議も大詰めを迎えた09年12月。白川修二委員（健康保険組合連合会副会長）が支払い側を代表して5ページにわたる要望を読み上げた。

時間を省くために各項目の見出しだけを読み上げていく。第9項目にきたとき、「ここだけは、ちょっと説明の時間を」と断って、「全患者への明細書の無料発行を義務付けるべき」と内容に触れた。支払い側にとって明細書の問題は、さほど重要なテーマではないはずだ。にもかかわらず白川が、あえてここだけ踏み込んだのは、今期で退任する勝村への粋な計らいではなかったか。

「白川さんの男気に、涙がこぼれそうになるくらい感動した」

そして年が明けた10年1月の中医協で、勝村は賭けに出た。

事務局案には、明細書について「義務付けられる医療機関の対象を

拡大する」としか書かれていない。全患者への無料開示とは大きな隔たりがある。

勝村は、隣に座る同じ支払い側の女性委員に筆談で「ちょっとキレてもいいですか」と断って発言を求めた。

「非常に不信感を持っている」

怒気を込めた声に、場内の空気が張り詰める。そして前々回の会議での、白川の発言に触れた。

「(全患者の無料発行を1号側(支払い側)全員の連名としてやってほしいと書いていただいて、時間のない中、白川委員はその部分だけ……」

そう言うと、うかつにも声を詰まらせてしまった。だが声を絞り出す。

「その部分だけ読み上げていただいたんですよ。それで、何でこんな出され方なんですか。僕はまったく理解できないです」

白川の計らいで特に強調されたはずなのに、この扱いは何なんだ。そう言いたかった。

開示を勝ち取る！ 星の王子さまで知る日常の大切さ

会議後、事務局である厚労省の女性事務官が近づいてきた。勝村は、何を話したか具体的に覚えているわけではないが、そこで口頭で提案された文言を聞いて、一筋の光が差し込んだように感じた。

「この人に託したい」

当時、保険局の保険医療企画調査室長だった渡辺由美子であることは後に知った。現在、大臣官房の会計課長を務める渡辺は、当時の様子をよく覚えていた。

勝村が泣いた会議の後、課内の打ち合わせで渡辺は「私がやりましょうか」と引き取ったことを明かす。

「この年は政権交代で中医協委員の選任が遅れ、かなりバタバタしていた。担当が医療、歯科医、薬剤など分野別に分かれているので、レセプト開示はエアポケットのように抜けてしまって。強硬な反対もなく機も熟していたので、各方面と折衝し練り直すことができた」

最終的に提案された文言だ。

「以下に掲げる正当な理由がない限り、原則として明細書を無料で発行することとする」

例外はあるものの、全患者への無料発行義務化が決まった瞬間だ。

勝村は中医協の任期を終えた後も、「医療情報の公開・開示を求める市民の会」の世話人を続けるなど市民運動にかかわっている。昨年は腹腔鏡手術ミスなどを起こした群馬大学医学部附属病院の医療事故調査委員会に名を連ねるなど、医療と患者の橋渡し役を担う。

夫妻は高校の同級生。妻の理栄ははっきりと物を言うタイプ。2人で人生を歩んできた

勝村は、医療事故で苦しんでいるときでもルーティンをこなそうとした理栄を見て、『星の王子さま』の場面を思い出すのだという。

王子は地球にやってくるまでに、6つの小惑星を旅して住人と知り合った。威張りん坊の王様や褒められないと気が済まないうぬぼれ男の中で、5番目に登場する「星の自転に合わせて街灯を点滅させる勤勉な点灯夫」だけが星の役に立っていると王子は語っていた。勝村はそれには賛成できないと思っていた。

だが理栄を見ていて、王子の判断が正しいと思えるようになった。どんな窮地にあってもコツコツ役割をこなすことが、どれほど大切か。その精神的な強さは、生命力につながり、さらには生きることの意味を教えてくれる。

亡くなった長女の10回目の命日に当たる00年12月。勝村は星に還った星子に会うために、家族を連れて流星観測をしに近所に出かけた。子どもたちが疲れて寝袋で寝入ってしまうと、理栄と語り合いたくなった。裁判でも市民運動の会合でもいつも隣り合わせで、向かい合って話すことがなかったからだ。

「少し話そうよ」

だが理栄は、つれなかった。

「子ども寝たから、はよ帰ろ。明日の朝も早いし」

そう言って片付けを始めた。あくまでルーティンを守りたいらしい。

＝敬称略＝

辰濃哲郎（たつの・てつろう）●1957年生まれ。朝日新聞で事件や医療を担当し2004年に退社。医療や社会問題などを中心に執筆。著書に日本医師会を描いた『歪んだ権威』など。